

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第40回

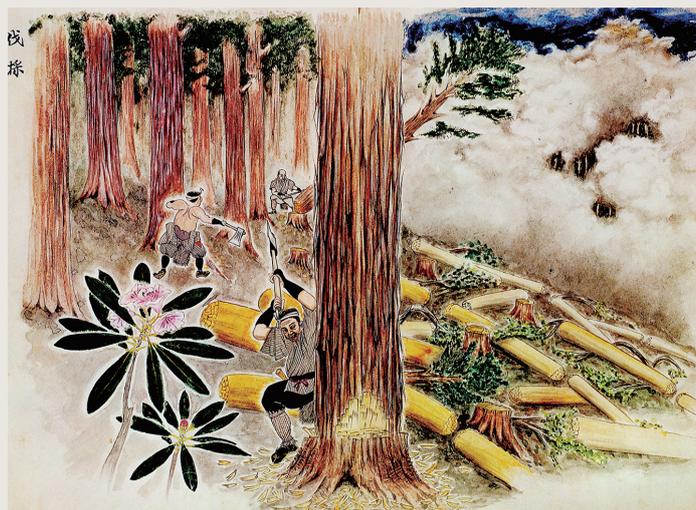
中部森林管理局総務課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともに紹介します。

「裏木曾」その四 斧による伐採

長野県側の「木曾」と同様に、「裏木曾」においても木の伐採には主に斧（ヨキ）のみが用いられていました（大正時代初め頃まで）。



「付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解」より
“伐採”（明治末頃の伐採のイメージ）

斧を用いた伐採は大きな音が出ますので、江戸時代に木曾・裏木曾地域を領していた尾張藩がわざと斧を使わせないという説もあります。しかし江戸時代頃の鋸の性能も決して良いものではありませんでしたので、斧での伐採が鋸よりも効率の悪いものであったというわけではありません。

特に太い木を伐る場合には三方向から斧で空洞を空けてから伐採する「三ツ緒伐り」（木曾

大正時代、裏木曾での神宮（伊勢）の式年遷宮関連行事で伐採される大樹（おそらく現在の東濃森林管理署加子母裏木曾国有林）。大正時代の「三ツ緒伐り」の様子を見ることが出来る。



昭和二十年代頃、現在の東濃森林管理署加子母裏木曾国有林での斧による大材伐採の様子



では「三ツ紐伐り」と呼ばれる方法が取られました。この技法は「三ツ伐り」「台伐り」「鼎伐り」といった様々な呼称もあり、「三ツ緒伐り」の名も定着したのは比較的近年のことではないかという説もあります。

大正時代頃からは鋸も組み合わされるようになり、昭和三十年代にはチェーンソーが伐採の主役となっていきます。

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、コードを読み込んでください。

